

方言文法——引用表現に由来する主題提示の形式を題材に

小西いずみ
(こにし・いずみ)

1 はじめに

日本語諸方言の文法に関する研究が、これまで、日本語あるいは言語一般の文法研究にとつて意義のある成果をなしてきてきたことは、すでに広く認識されているであろう。比較的最近のものを見ても、格、テンス・アスペクト、可能表現など、特定の文法カテゴリ・文法形式についての共時的な記述や、文法形式の発達や意味・機能変化についての通時的な研究が行なわれ、興味深い事象・データを提供している。

この稿では、筆者が最近取り組んでいる、主題提示の形式、特に引用表現に由来する主題提示の形式を題材とし、方言の文法とその研究の一端を伝えたい。《主題提示》(以下、「提題」とすることもある)は、現代共通語、あるいは文献資料を中心とした日本語史の研究において非常に活発な議論がなされてきたテーマの一つである。現代共通語に

おける主題提示の形式の中心的なものは「は」であるが、そのほかに、 ϕ (ゼロ形式)、引用の形式に由来すると言われる「つて」、条件表現に由来する「なら」などがある(益岡・田窪一九九二)。諸方言においても、「は」にほぼ対応するような代表的な形式とともに、引用表現に由来するもの、条件表現に由来するものがあり、なかには共通語の歴史には見られなかった発達をとげたものもあるが、それらに関してはこれまであまり注目されてこなかったように思われる。ここでは、特に引用表現に由来する主題提示の諸形式をとりあげ、共通語の「つて」などと対照しながら、その意味・用法のあり方について見た上で、その研究の意義について簡単に述べたい。

2 富山方言の「チャ」

富山方言には次のような助詞「チャ」がある(注1)。

(1) アンタモ行クチャ 思ワング。(あなたも行くとは思わなかった。)

(2) A チョット 田中サントコ 行ッテクツチャ。(ちよっと田中さんのところに行ってくるよ。)

B 田中サンチャ 誰ケ。(田中さん「つて／＼」
のは／＼とは) 誰?)

(3) オースチャ 何ノ略ケ。(OS 「つて／＼」
のは／＼とは) 何の略?)

(4) 田中サンチャ 意外ニマジメダネ。(田中さん「つて／＼」
という人は) 意外にまじめだね。)

(5) ダツカ B型ノ人チャ オツケ。(誰かB型の人
についている?)

右の例のように、「チャ」は、共通語の「とは」や「と
いう十名詞十は」「つて」に対応している。「チャ」には、
大きくわけて、(a)共通語の「引用の助詞「と」+
主題の助詞「は」」に対応する用法と、(b)共通語の「と
は」や「つて」にほぼ対応する主題の助詞としての用法が認めら
れる。

(a) 「引用の「と」+主題の「は」」に対応する用法とは、
次の(6)(7)や右の(1)のような例である。この「と十は」
における「は」は、「対比」の意が強いものであり、
述語には肯定形よりも否定形がくることが多い。

(6) 今日雨降ルチャ ユートラン。(今日雨が降るとは言

っていない。)

(7) オラ コイハヨ起キレチャ イワナング。(私はこ
んなに早く起きるとは言わなかった。)

藤田(二〇〇〇:四五九)が述べるように、共通語の「
は」には、「引用の助詞「と」+主題の助詞「は」」に分析
できるものと、そのように分析できず、ひとまとまりで機
能するものがあるが、右の例は前者の場合である。この類
の「とは」は、(多少自然さが損なわれる場合も多いが)
「は」を除いた表現が可能である。

(6') 今日雨が降ると言っていない。

(7') 私はこんなに早く起きると言わなかった。

(1') あなたも行くと思わなかった。

富山方言の「チャ」は、次のように引用の「と」単独に
対応する場合には用いられない。

(8) ?? 今日雨降ルチャ ユータ。(今日雨が降ると言
つた。)

この文が用いられるとすれば、「雨が降るとは言ったが、
雪が降るとは言っていない」など、やはり共通語の「と十
は」に対応する、「対比」の意味を含む場合である。

(b)の主題助詞としての用法とは、先の(2)~(5)や、次のよ
うな例である。

(9) イマサラ帰リタイチャ ナサケナイ。(いまさら「帰りたい」とは情けない。)

(10) イマサラ帰レチャ 何ユーガケ。(いまさら「帰れ」とは何を言うのか。)

(11) 台風来ルチャ ホントケ。(台風が来る「つて」というのは「とは」本当?)

(12) ユーウツチャ ドー 書クガカイ。(「ゆううつ」つてどう書くの?)

(13) 駅チャ ドコニアツケ。(駅つてどこにある?)

(14) アンタチャ 目 大キーネ。(あなたつて、目が大きいね。)

(15) オラ 風邪チャ メッタニヒカン。(私は風邪つてめつたにひかない。)

これらの例のように、この類の「チャ」は、共通語の主題提示の「とは」「と+は」に分析できない「とは」や、同じく主題提示の「つて」や「というの」に対応するものである。

「とは」「というの」「つて」は、ともに、引用表現に由来するものであり、その用法の一部に「言葉を再現して提示する」(丹羽一九九四)という、引用の形式としての側面を比較的強く残したものがあつた。先の例では、(2)(3)や(9)〜(12)がそれにあたる。これに該当する「とは」には、(9)(10)など、他者の言葉を受けてそれに対する「評価」や「と

がめ立て」を述べるものが含まれるが(藤田二〇〇〇:四六〇)(注2)、この場合「つて」は用いにくいように感じられる。それに対して、富山方言の「チャ」は問題なく用いることができる。

(4)(5)や(13)〜(15)は、物事の属性や評価や存否(存在するかどうか)(注3)について述べた例であり、「言葉を再現して提示する」類に比べて、《主題提示》という側面がより強いものと言える。ただし、丹羽(一九九四)はこの類の「つて」「というの」は「とは」には、上接語が指示する物事について「改めて捉え直す」という側面が見られ、その点で「は」とは異なり、《引用》という性格を保持しているという。

また、丹羽(同)は、「捉え直し主題」を表す「つて」「というの」は「とは」のなかで、「とは」の用法がもっとも狭く、「つて」の用法がもっとも広いと指摘する。「とは」は、(5)や(15)のような物事の存否を問題にする用法を持たず、もっとも《引用》という性格を強く残したものと言える。また、「とは」や「というの」は、一時的な状態を表す述語の場合や、指示語を前接語とする場合には用いられないが、「つて」はそれらの場合にも用いることができる。富山方言の「チャ」も、次に示すようにいずれの場合にも用いることができる。

(16) 太郎チャ 今 アソコデ 働イトンガダト。(太郎つ

て今あそこで働いているんだって。

- (17) (歩いていて、何かわからない建物をみつけて) アレ
 チャ 何ダロカネー。(あれって何だろうか?)

「チャ」は、「名詞+助詞」、「名詞+断定デ」、動詞のテ
 形といった丹羽(一九九四)のいう「文断片」に接続する
 ことができる点で、「って」と異なる(この点は山田(二
 〇〇一)がすでに指摘している)。この場合の「は」「チ
 ヤ」は対比の意味を帯びることが多い。

- (18) 北海道ニチャ 行ツタコトアル? (北海道には行っ
 たことある?)

- (19) おら小さかったから人の間潜って目で見たが、
 母親や姉にちや回りのもんが一切見せなんだ。(私は
 小さかったから、人の間をもぐって行って自分の目
 で(父の遺体を)見ることができたが、母親や姉に
 はまわりの者が一切見せなかった。)

〔北前・父の遭難〕

- (20) ソノアトチャ ナラ ドイ シゴト アシクラデチ
 ヤ シトラレタ。(そのあとは じゃあ どういう
 仕事を 芦峠では しておられた?)

〔立山〕

- (21) 行くことは行くけれども、ただでちや行かれん、(行
 くことは行くけれども、ただでは行けない)

〔射水・娘と青大将の話〕

- (22) そして、なかなか思うように風呂の中へつかってち

や おれんだとお。(そして、なかなか思うように風呂
 の中につかっではいらなかったそうだ。)

〔射水・皿と卵と徳利〕

一方、共通語の「とは」や「って」が用いられて、富山
 方言の「チャ」が用いられない場合もある。まず、共通語
 の「とは」には、(9)(10)のような用法の延長として、「とは」
 で言いさして終助詞的に用いられる用法があるが、富山方
 言の「チャ」はこのような場合にはきわめて用いにくい。
 共通語の場合、「とは」に終助詞の「ね」などが直接付く
 場合もあるが、その場合も富山方言の「チャ」は用いられ
 ない(注4)。

- (23) ??イマサラ帰リタイチャ。(今さら「帰りたい」と
 は。)

- (24) ??イマサラ帰リタイチャネ。(今さら「帰りたい」
 とはね。)

また、共通語の「って」には、物事の存否について述べ
 る用法の一つとして、存在についての確認要求を行なうも
 のがあるが、富山方言の「チャ」にはそのような用法がな
 い。「あるだろう?」「あるじゃない?」のような確認要求
 ではなく、「ある?」と存在について尋ねる場合には「チ
 ヤ」も、問題なく用いられる。この類の確認要求文の「つ
 て」が、「というの」ではなく「というの」に置き換

えられるのは興味深いことである。富山方言の「チャ」の問題というよりも、「つて」の用法の広がり的问题として考えるべきであろうか。

(25) *焼肉食い放題|チャ アンネカ? (焼肉食い放題|つてあるじゃない?)

(26) コノ辺ニ 焼肉食い放題|チャ アル? (この辺に焼肉食い放題|つてある?)

富山方言の「チャ」は、音形の上でも、また先の(a)の用法を持つという点からも、共通語の「とは」のような「引用の助詞+提題の助詞」に由来する形式ではないかと考えられる(注5)。しかし、意味・用法においては、共通語の「とは」よりも広く、「つて」の用法もほぼカバーするものとなっている。

3 石川県金沢方言・兵庫県相生方言などの

「チュータラ」「ユータラ」

石川県の金沢方言では、語源的・形態的には(引用の助詞+動詞「言う」の仮定条件表現「と言つたら」)に対応する「チュータラ」が、次のように使われる(注6)。

(27) A: 山田サンニモ 知ラセヨ。

B: 山田サンチュータラ ダレ。(山田さん|つて誰?)

A: 山田サンチュータラ 三丁目ノアノ山田サンノコトヤ。(山田さん|というのは三丁目|のあの山田さんのことだ。)

(28) 松井選手ガ来ルチュータラ ホントカ。(松井選手が来る|つて本当?)

(29) (一緒に酒を飲んでいる相手に) アンタチュータラ 酒 強イガヤネ。(今までは|気づかなかつたけど) あなた|つて、酒が強いんだね。)

しかし、金沢方言の「チュータラ」は、右のように言葉を引用してその意味等について述べる場合や、物事の属性について述べる場合には用いられるが、「とは」に対応する場合や、物事の存否を捉え直す場合には用いることができない。富山方言の「チャ」よりも用法が狭いと言える。

(30) *アントモ 行クチュータラ 思ワナンド。(あなたも行く|とは思わなかつた。)

(31) *誰カ B型ノ人チュータラ オル? (誰かB型の人|つている?)

また、兵庫県相生方言でも「と言つたら」に対応する「ユータラ」が、次のように、「つて」や「というの」で言い換えられる、物事の属性を述べる場合に用いられる(注7)。

(32) (子供の頃、あるおじいさんが、狐に化かされる話を

よくしてくれたという話題で) ホデ ケツコンシキ
ニ、コンレーデ、ノセノ コンレーデ イツキヨ
ツタラ、ソノー キツネ ユータラ アタマオ コ
ー アノー タウエ シタ ミズテナー、アタマオ
コーツト ナゼタラナ、バケルンヤター。(それで
結婚式に、婚礼で 野瀬の 婚礼で行っていたら、
その きつね 「と」 いうのは 頭を こう やつて
田植え「を」 した 水でね、 頭を こう やつて
なざるとね、 化けるんだって。)

(「ふるさとことば」兵庫県相生市、112)(共通語訳はテキ
ストのまま)

この方言については、自然談話資料から用例を得ただけで
あるので、「と+は」に対応する用法や存否について述べ
る用法などもあるのかどうかについては確認していない。
共通語の引用の仮定条件表現「と言えは」も、名詞句を
うけて「は」や「というの」に言い換えられる場合に用
いられることもあるが、これは「連想をひき出すキーワー
ドをもち出す」(藤田二〇〇〇：四一六)もので、右の金
沢方言や相生方言のような例では用いることができない。

(33) 今まで高い山といえは、比叡山と愛宕山だけだと思
っていたのに、

(今西錦司「探検」、藤田二〇〇〇からの孫引き)

4 研究の発展——引用表現・条件表現に由来する 主題提示の形式の発達について——

以上、富山方言の「チャ」、金沢方言・相生方言の「チ
ュータラ」「ユータラ」といった引用表現に由来する主題
提示の形式について概観した。富山方言の「チャ」は、す
でに述べたように、恐らく共通語の「とは」のような(引
用の助詞+主題の助詞)に由来するものと思われるが、現
在では、「つて」もカバーするような用法を発達させてい
る。また、「ユータラ」「チュータラ」は、(引用の助詞+
動詞「言う」の仮定条件表現)に由来するものであるが、
共通語の「と言えは」に比べて主題の形式としての性格が
より強いものになっていると言えらる。このような諸形式の
意味・用法についての共時的な記述や、その発達について
の通時的な考察は、(引用)と(主題提示)との関連を考
えるための有益な材料となるであろう。

方言における主題提示の形式には、ほかにも共通語には
見られない独自の発達をとげたものがある。日高(二〇〇
〇)によると、秋田方言では、本来は仮定条件を表す形式
である「ダバ」が、次のように主題提示の形式として用い
られるという。

(34) A: コレゆ オメアノ ホンダガ? (これはおまえ
の本か?)

B・Aエ コレンジンバ オレアッタデア。(ああ、これは私のだよ。)

『方言文法全国地図』(国立国語研究所編一九八九)第10図「あれは(学校だ)」「あれは何か」と聞かれて「あれは学校だ」と答えるとき)や、第11図「ビールは(飲まない)」、第12図「酒は(飲む)」「あの人は、ビールは飲まないが、酒は飲む」においても、秋田県から青森県津軽地方にかけて「ダバ」等の仮定表現に由来する形が分布することが確認できる。共通語でも仮定条件の「なら」が主題提示の用法を持つが、「ダバ」は『方言文法全国地図』第11図のような場合にも用いられることから、明らかに共通語の「なら」よりも提題(《対比》の意味を含む)の助詞として発達したのと言える。《条件》と《主題》との関連については、高梨(二〇〇三)などが、共通語の「なら」の用法を手がかりとして考察しているが、秋田方言の「ダバ」のような形式の用法についての記述は、そのような考察にとつても有益であると思われる。

注1 以下の「チャ」の用例・記述は、稿末の「用例出典」にあげた方言談話資料、面接質問調査で富山市方言話者三名(一九二二年生・男性、一九三三年生・男性、一九四五年生・男性)から得られたデータ、および、筆者(一九七三年生・女性、一八歳まで富山市に在住)の内省に基づくものである。用例については、共通語の「とは」「って」

「という十名詞十は」について記述した藤田(二〇〇〇)や丹羽(一九九四)の例文を参考にしたものがある。なお、「くチャ」には、「くツチャ」という異形態もあるが、両者に意味・用法の差はなさそうであり、自由変異の関係にあると言つてよい。本稿では「くチャ」に統一する。

注2 藤田(二〇〇〇:四六六―四六八)は、この類の「とは」でとりあげられるのは意外なものでなければならぬとし、例(1)のような認識・思考動詞の否定形「思わなかった」「知らなかった」が意外感の表明の言葉として述語に用いられた場合も、その一種であるとする。本稿では(1)のような「とは」「とは」に分析できる例として扱ったが、確かに、「とは」に分析できるものと、ひとまとまりで提題助詞のように働くものとの連続性を示す例と言えらるであろう。

注3 「存否の題目語」については丹羽(二〇〇四)も参照。(5)のような存在を表す用言を述語とする例だけでなく、(4)のような出来事の頻度を問題にするものも含む。また、存在の用言を述語とするものであつても(4)は、「駅」の属性を問題にしたもので、存否を問題にしたものとは言いにくい。

注4 「何ユートンガケ、イマサラ帰リタイチャ。」(何を言っているのか、今さら帰りたいとは。)といった倒置文、「イマサラ帰リタイチャ?」(今さら帰りたいとは(どういうこと)?)のような言いさしの疑問文は可能である。なお、終助詞的な「チャ」が用いにくいのは、富山方言に別の終助詞「チャ」があることと関係があるかもしれない。

終助詞「チャ」については井上（一九九五）を参照された
い。

注5 山口（一九九九）は、「って言えば」に対応する形式
に由来するものと推測しているが、そのような形式が
「と+は」に対応する用法を持つに至るのは難しいと思わ
れる。

注6 金沢方言の用例・記述は、一九二七年生の男性、一九
四〇年生の女性から面接質問調査で得られたデータに基づ
く。

注7 この方言では、引用の形式が ϕ （ゼロ形式）となる
ことがあり、「ユータラ」も「と言ったら」に対応すると
言える。

用例出典

〔北前〕井本三夫（編）（一九九八）『北前の記憶』桂書房

〔立山〕水野元雄（編）（一九八二）『立山町とその周辺の方
言』私家版

言』私家版

〔射水〕伊藤曙覧（編）（一九七一）『越中射水の昔話』三弥
井書店

〔ふるさとことば〕国立国語研究所（編）（二〇〇二）『全国
方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第
13巻 大阪・兵庫』国書刊行会

参考文献

参考文献

井上 優（一九九五）『方言終助詞の意味分析—富山県砺波
方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」—』『国立国語研究所研究
報告集』十六

報告集』十六

国立国語研究所（編）（一九八九）『方言文法全国地図』第1
集 大蔵省印刷局

高梨信乃（二〇〇三）『遠そうで近い条件と理由、条件と主
題』『月刊言語』第三三巻三号

丹羽哲也（一九九四）『主題提示の「って」と引用』『人文研
究』四六（第二分冊）

（二〇〇四）『名詞句の定・不定と「存否の題目
語』『国語学』第五五巻二号

日高水穂（二〇〇〇）『秋田方言の文法』秋田県教育委員会
（編）『秋田のことば』無明舎出版

藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院

益岡隆志・田窪行則（一九九二）『基礎日本語文法』改訂版
くろしお出版

山口幸洋（一九九九）『富山県方言の談話資料(1)』『地域言
語』第十一号

山田敏弘（編著）（二〇〇二）『文法を中心としたとやまこと
ば入門』

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B1）『方言における
文法形式の成立と変化の過程に関する研究』（課題番号
14310196、研究代表者：大西拓一郎）、基盤研究（C1）『日
本語諸方言の条件表現に関する対照研究』（課題番号
16520285、研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B1）『方言における
文法形式の成立と変化の過程に関する研究』（課題番号
14310196、研究代表者：大西拓一郎）、基盤研究（C1）『日
本語諸方言の条件表現に関する対照研究』（課題番号
16520285、研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

研究代表者：前田直子）による成果の一部であ
る。

——東京都立大学助手——